

〔資料紹介〕

## 深浦町・春光山円覚寺薬師堂内厨子（国指定重要文化財）に記された 中世末期―近世初期の落書をめぐって

小口雅史・三上喜孝・武井紀子・福井敏隆・瀧本壽史

### はじめに

青森県深浦町春光山円覚寺（真言宗醍醐派）薬師堂内の厨子の外面には、おびただしい数の墨書が残っていることが早くから知られていた。また円覚寺内の諸堂にもやはりおびただしい数の落書が存在している。厨子については、落書の墨がほとんど飛んでしまっていることもあり、具体的な釈読はなされてこなかったが、諸堂の落書の墨書については、幕末から明治期以後に書かれた比較的鮮明な状態で残っていることから、円覚寺の海浦由羽子氏によって手帳に丁寧に書写され、整理されてきた。

この円覚寺は、東北地方でよく見られる、大同二年、坂上田村麻呂建立とされる古刹で（『津軽一統志』首巻<sup>②</sup>）、古くから「淵口観音」として信仰を集めてきた<sup>③</sup>。また当寺には、堂宇造立棟札（康永三年六月日銘、永正二年十二月十七日銘）や鰐口（至徳三年六月二十四日銘）、懸仏（文明十九年六月吉日銘）といった中世の同時代資料が存在することも古くから知られており、青森県史編さん中世部会による詳細な資料調査もなされてい

る。その際に、当該厨子の落書にも気付いていたようで、赤外線撮影および斜光撮影がなされていた<sup>⑤</sup>。また当寺所蔵の鎌倉期にまで遡る貴重な聖教類の存在も認識していて、やはり写真撮影がなされている。ただしずれも理由は不明であるが、『青森県史』資料編中世に採用されることはなかったのも、結局、厨子落書については学界に紹介されないまま残されていた。

しかしながら墨書の墨は飛んではいるものの、ある程度肉眼で釈読できる場所もある。古代以来、膀示札などの出土遺物では、同様に墨が飛んでしまっているにもかかわらず、墨書部分が墨の防食作用により腐食せずに浮き上がるので、肉眼でもある程度は読める例がある。本稿共同執筆者は、そこに記されたいくつかの紀年銘から、これらの落書が、円覚寺内諸堂に残された幕末維新期以後の近代の落書とは異なり、中世末期―近世初期（一六世紀前半―一七世紀初頭）にまで遡るものであることを早くから認識していたので、当寺の海浦由羽子氏もその全体の早期の釈読を熱望するところとなっていた。

そうこうしているうちに各地で、寺院の落書の存在についての報告が

マスコミでも相次いで取り上げられることとなった。たとえば、岐阜県御嵩町の願興寺で、国指定重要文化財願興寺本堂修理中に、仏壇背面の壁の一六世紀後半の落書発見についての報道があり、数ヶ月後には、やはり国指定重要文化財の八戸市清水寺観音堂で保管されていた板木に天正十五年の落書があることが報道され、当時、日本最北の落書として注目されることとなった。<sup>⑦</sup>

そこで私たちも本格的に深浦円覚寺薬師堂内厨子の落書釈読に取り組むこととした。幸い、二〇二三年に、日本女子大学藤井雅子氏を研究代表者とする日本学術振興会科学研究費助成事業（科学研究費補助金）「日本海交易と宗教ネットワークから見た歴史的幹線の再発見」（基盤研究（B））が採択されたこともあって（研究分担者…小口雅史・武井紀子）、その資金を元に研究を進めることも可能となった。<sup>⑧</sup> 釈読会メンバーとしては、小口・武井に加えて、こうした落書研究に早くから取り組んでいた旧知の三上喜孝<sup>⑨</sup>を科学研究費補助金で招聘し、地元の近世史研究者である福井敏隆・瀧本壽史にも参加を求め、研究がスタートすることとなった。最初は青森県史編さんグループや横浜市歴史博撮影の写真を元に三上を中心に釈読を進め、他のメンバーとは電子メールを利用して意見交換をしながら作業がなされた。また二〇二四年二月には、弘前大学を会場に、メンバー全員が集まって、プロジェクトで既存の写真を大画面で投影しながら共有して釈読を進めることができた。今回報告する釈読文は（一部その後の現地調査の成果を若干取り入れたところがあるが）、基本的にはこの時の成果を踏まえてのものである。調査・研究は完了したわけではないが、円覚寺関係者をはじめとした地元への期待とその重要性に鑑み

て、これまでに判明した事実等について本稿で紹介してみたい。本稿によつて当落書が広く江湖の知るところとなり、今後の研究進展について様々な助言をいただければ幸いである。

## 一 落書釈文案

最初に未定稿ではあるが、現時点での釈読結果を、重要文化財指定時作成の保存図（実測図）<sup>⑩</sup>に、落書存在位置を図中の番号で示しながら、以下に掲げておくこととする。

### 【右側面】

#### ①（右側面3正面側）

□□

□□

□□

□□

□□□り

し時我□□

風□□

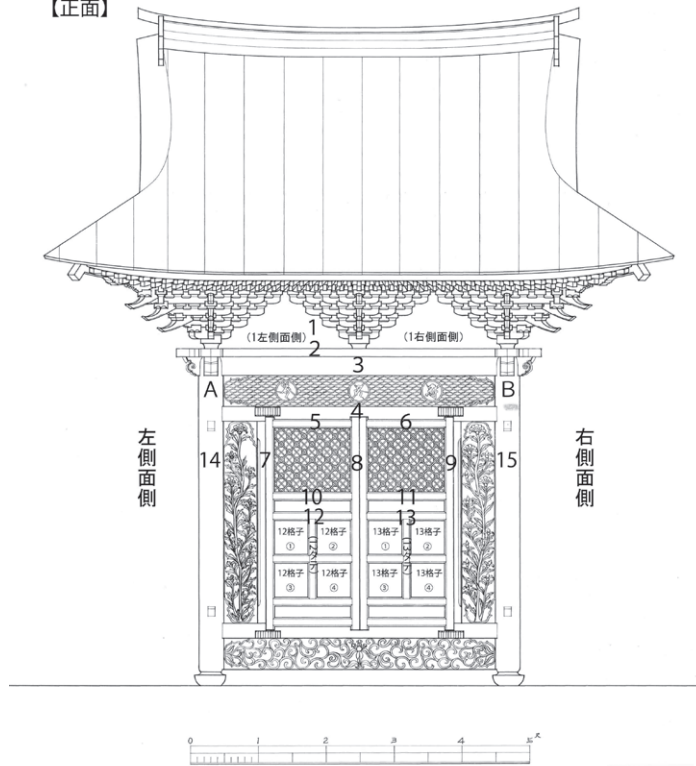
り□□候也

西村之三三郎

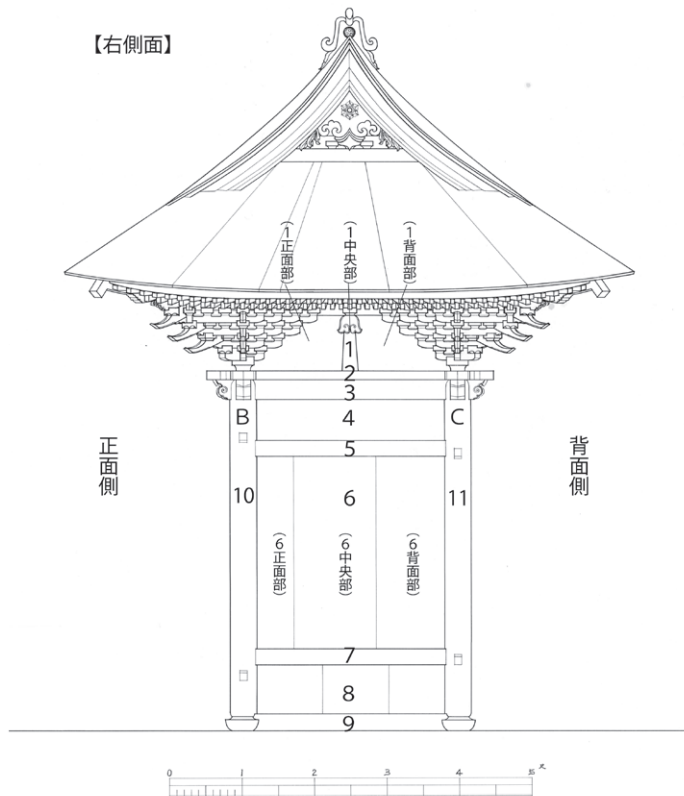
□□□新二郎

同 新五郎

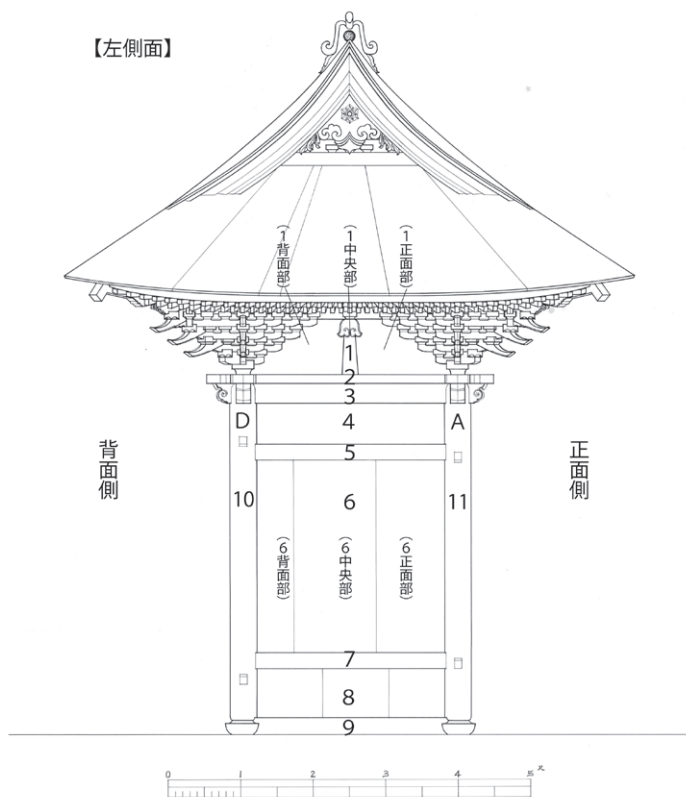
【正面】



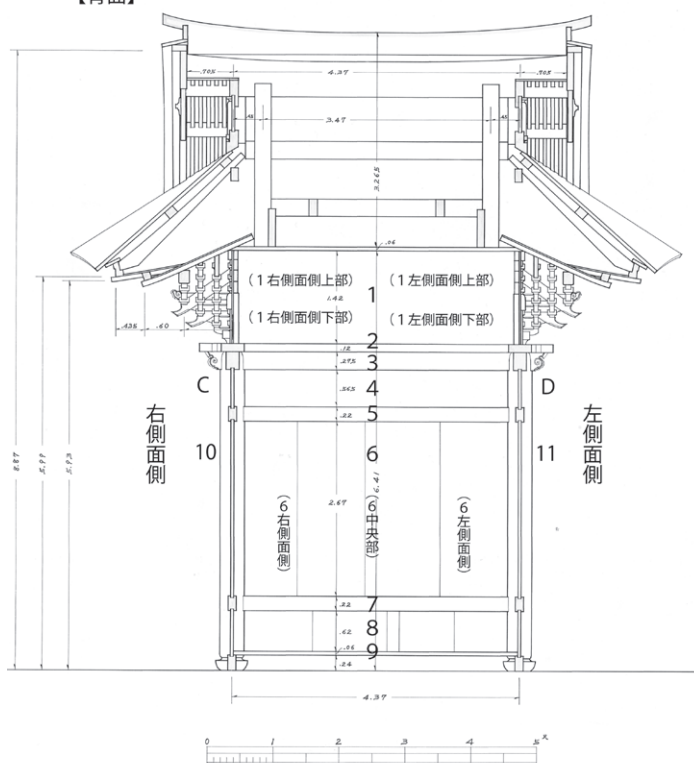
【右側面】



【左側面】



【背面】



内四郎三郎

家久（花押）

天文七年

□月吉日

②〔右側面4〕

上京衆

ま<sup>（寄力）</sup>とや□□

道嚴三郎

中川小三郎

河辺新四郎

木辺三太郎

中村□左

同□二<sup>（専之）</sup>郎

此人数松

より駄立申候

過分之料

□□□□□

目出度候

□□□□二ハや

治郎右衛門小□□可

申候

天文四年十月

□□

□□の十人

□□了

□□□

」

③〔右側面6中央部上段〕

山城国

八人

〔左側面〕

④〔左側面2背面側〕

いさくに

も神の

ほとけの

現し□は

□たの

む千寿

ニ□□

⑤〔左側面3背面側半分〕

□□□

の□

□□□

争同じ申物

ハあらそひ

や□□□

申物也

天文十一年

五月八日

同行

五人

□□□

□□□

□□□

□□□

□□□

⑥〔左側面6背面側上部〕

慶□参年

伊勢

(馬の絵)

奉読誦□□廿三卷

※この面、複数の筆跡による墨痕多数あり。黒印跡も確認できる。

【背面】

⑦〔背面1左側面側上部〕

経部様之

御下人

かたミ／＼

久保田ノ

者也

⑧〔背面1中央上部〕

難儀

□□□□

申人ハ

同行

三人

元和五年

五月拾

日 (花押)

※「難儀」の右に一〇行ほどあるも、未釈読。

⑨〔背面1右側面側上部〕

秋田

当年□□

□てに□□人下

やめ□□

□□にて候

一□□□

□□五年 しふや  
高七

⑩〔背面1左側面側下部〕

辻□助□

かたみ □□□□

□□へ □□□□

□

人

※「かたみ」の段は左側面側上部から続けて書く。

⑪〔背面1中央部下部〕

天正二拾年八月十日

かたミく

かたミとなれや

⑫〔背面2〕

□□□崎の住ひの小大□松前江駄下いたす也文禄三年六月□日

※ 横材部分に右から横書き一行で記している。

⑬〔背面3左側面側〕

当年□□

然□□

□より□□

申候 文禄二年

如月五日

えちせん国つるかの住人

長谷川甚四郎

□もうし又

つれなるも

かなし さぞあはれ

かなし うきよ

身なれば

⑭〔背面3左側面側中央部〕

□□

□□

□□

□□

伊勢山田□平

いせや十蔵

了

九月十二日

なら 助□

みの 源助

長の 新十郎

加々 勘十郎

いせ □□

同 十蔵

七月 □□

かたみく

⑮〔背面3右側面側〕

同行□

文禄二年

九月廿日

□□

の□□

□の□□

□□  
(浅方勤方)

□□

かたみく

□あし

□□

□□

□□

□□

⑯〔背面3右側面側中央部〕

□□  
(名カ負カ)  
物者

江州長濱

住人同道

□□□□  
(大)(介)(右衛門)

同 □□□□

□□

□□

□□

□□十蔵

同□□蔵

□□  
(久保カ)

□□□□

九月□□

⑰〔背面4〕

江州□□

住人同道三人

江州□□

村□□

□善吉

かたみく

天正十七年

六月□□



「書おく」□

かたみ形

見□ かた

ミ かたミ

此□ふ人

のめいと

めす 所

□□新九郎

□□太郎三郎

書之」

※「書おく」以降の部分は、「背面4・5」にまたいかかっている。

# ⑱〔背面5左側面側〕

□

□□

□□関

住人

□□

□□

□□

□□

□□

# ⑲〔背面5右側面側〕

書おく

も

かたミ

と

なれや

筆の

□□

## 二 落書の状態

円覚寺薬師堂内の厨子外面の落書は、もともと墨で書かれたものが、現状では（背面などごく一部を除き）ほとんど墨が残っておらず、墨で書かれた部分が盛り上がって残っているために、かろうじて文字の痕跡が確認できる。これは、本稿「はじめに」でも既述したように、板材が風化していく過程で、墨の防腐蚀作用により文字の部分が守られ、風化のスピードが遅くなるため、文字の部分だけが盛り上がって残り、のちに墨が剝落したことによって起こる現象である。このような現象が起こるのは、墨書した面が長期間にわたって外気や太陽光にさらされていたためで、すなわち厨子の外面に墨書されていたことによって、こうした現象がもたらされた。

この場合、墨がほとんど残っていないので赤外線カメラ等による観察はあまり意味をなさず、斜光により板材の表面の凹凸を浮き立たせたう

えて、文字の部分を読むことが最も効果的な方法である。今回の釈文作成にあたっては、主に以前に青森県史編さん中世部会によって撮影された斜光写真等を利用して解説を行った。

ただし、厨子背面の上部は墨の残りがよく、赤外線写真による観察が功を奏する<sup>⑪</sup>。これは、厨子の上部が屋根で守られていることにより、外気や太陽光等による風化の影響が少なかったためである。

### 三 落書の年代

円覚寺薬師堂内厨子の落書には年号が書かれたものが複数確認される。これらから、落書が書かれた年代とその時期幅を知ることができる。以下、落書に書かれていた年号を古い順に拾っていくと、天文四年（一五三五）、天文七年（一五三八）、天文十一年（一五四二）、天正十七年（一五八九）、天正二十拾年（文禄元年、一五九二）、文禄二年（一五九三）、文禄三年（一五九四）、慶□参年（慶長三年とすれば一五九八）、元和五年（一六一九）である。落書の時期は一六世紀前半の天文年間から一七世紀初頭の元和年間までの、およそ八〇年間のうちにおさまる。

これまでの研究成果によれば、観音堂や薬師堂に書かれた落書は一六世紀後半―一七世紀前半のなかにおさまる事例が多く見られるが<sup>⑫</sup>、円覚寺薬師堂内の厨子の落書は、そうした傾向よりもやや古く、一六世紀前半頃から書き始められている点は注目される。これが何を意味するのは、今後の検討課題である。

### 四 落書にみえる地名

円覚寺薬師堂内厨子の落書には地名が書かれたものも多く見られる。

これはその地名の住人が円覚寺に参詣している事実を示している。現在判明している限りでは、「山城国」、「伊勢山田」、「えちせん国つるか」、「秋田」、「久保田」、「加々」、「江州長濱」、「江州」等である。

このなかで注目されるのが、「江州長濱」（滋賀県長浜市）や「えちせん国つるか」（福井県敦賀市）である。敦賀から深浦へは日本海ルートでの移動が想定されるが、江州長浜の住人も、琵琶湖づたいに北上して山越えて日本海の敦賀に出て、やはり日本海ルートで深浦の円覚寺にたどり着いた可能性も考えられる。深浦は江戸時代中期（一八世紀中頃）以降に北前船の風待ち湊として栄えるが、それに先立って、日本海側ルートの信仰の道が存在していたことを示唆する。

### 五 落書にみえるフレーズと歌

円覚寺薬師堂内厨子の落書にはしばしば「かたみかたみ」というフレーズが見られる。これは全国的に、一六世紀後半―一七世紀前半の観音堂や薬師堂の落書にあらわれる定型的なフレーズであり<sup>⑬</sup>、いわば落書をするときに書くべき定型表現の一つといつてよい。

これと深く関連するのが、「書き置くもかたみとなれや筆の跡われはいづくの土になるとも」という歌である。「自分の書いた筆跡がかたみとして残ってほしい。自分がどこで死ぬことになろうとも」といったよ

うな意味の、出典不明の歌なのだが、全国各地の観音堂や薬師堂に書かれた一六世紀後半―一七世紀前半の落書にのみ登場するものである。<sup>14</sup> 円覚寺薬師堂内厨子の落書のなかにも、この歌の一節を書いた落書が数カ所確認され、当時各地の観音堂や薬師堂を巡礼する人々に共有されていた歌が、円覚寺においても確認されたことの意義は大きい。「かたみかたみ」の定型表現も含め、円覚寺が当時の巡礼のネットワークのなかに位置づけられていたことを示している。

### むすびにかえて

以上、深浦・円覚寺薬師堂内厨子の落書に関して、これまでの調査で判明した事実について簡単に解説を加えた。今後の作業としては、まずは釈文のさらなる確定が必要である。

先にもふれた科学研究費補助金の助成を受けて、本年（二〇二四）七月九日―十二日に、奈良文化財研究所の中村一郎氏、上相英之氏に現地に来ていただき、あらためて落書全般について写真を撮り直していただいている。中村氏には斜光カラー撮影と斜光赤外線撮影を、上相氏にはあわせてそれらをもとにした、ひかり拓本作成を依頼している。<sup>15</sup>

今回の撮影対象落書については、風化により墨のあつた部分が浮き上がりとして残っているもの、わずかに墨痕が残っているもの、墨文字がそのまま残っているものなど多様なため、中村氏にはカメラを変えずにカラー撮影と赤外線撮影の切替可能な機種をもちいて、同じ斜光線ライトを使って撮影を実施していただいた。この方法では木目が風化して

いないものに対しては赤外線斜光により木目を軽減し、墨のあつた部分の盛り上がり強調することができ、斜光カラーでは木目が風化して影が出てしまいがちな場合には赤外線よりも見やすくなる傾向がある。今後はそれぞれの画像を見比べながら見やすいものを選んで釈読を進めることになる。

さらに本年三月の予備調査の段階で、中村氏から、ひかり拓本の技術を活用するとさらに良質の写真が得られる可能性が示唆され、本年七月に上相氏にひかり拓本作成をお願いすることとなった。奈文研の写場で行っている赤外線画像とひかり拓本画像をずれなく合成する手法を試すため、OMデジタルソリューションズ（OMDS）からIR撮影と通常光撮影が可能なEMIRを借りてきて調査していただいている。中村氏からは撮影結果を送付していただいているが、それを用いたひかり拓本については、上相氏の作業になお相当の時間を要するようである。

中村氏からいただいたファイルを拝見すると、釈読の精度が向上することは間違いない。本年七月の調査では、新たに黒印や立派な馬の絵の存在も発見された（前掲釈文に一部反映させている。なお黒印が集中するのは正面扉部分である）。<sup>16</sup> 新たに撮影された写真やひかり拓本が届けば、今後さらに精緻な釈文を作成し、厨子の落書の全体像を明らかにし、考察を深めることが可能になる。今回は、まず円覚寺薬師堂内厨子の落書の存在を地元や学界に早期に紹介する必要性を感じて、速報的にお伝えした次第である。

なお本稿は「はじめに」と「むすびにかえて」を小口が執筆し、一を執筆者全員参加による検討会の成果を踏まえて三上が成稿後、武井が補

訂し（落書の存在位置を示す番号の、図面への挿入も武井が担当した）、二一五を三上が執筆し、その上で小口が全体の表記の統一をはかったものである。

## 註

- (1) 「薬師堂」とされながら、厨子内には薬師如来が存在しないことについては、『青森県史』文化財編美術工芸「第二章第二節 中世の造形」3 「円覚寺薬師堂内厨子の仏像」（青森県、二〇一〇）参照。
- (2) 『青森県史』資料編中世3（青森県、二〇一一）。
- (3) 円覚寺の歴史については、海浦義観『陸奥津軽深浦沿革誌』（深浦保勝会、一八九八）、豊島勝蔵『深浦澗口観音古文書』（西北刊行会、一九八五）などがある。また『深浦町史』上（深浦町、一九七七）、『同』下（同前、一九八五）等にも記載がある。
- (4) いずれも『青森県史』資料編中世4（青森県、二〇一六）に掲載。
- (5) 当寺には、国指定重要有形民俗文化財「円覚寺奉納海上信仰資料」が存在するが、船絵馬を調査に訪れた横浜市歴史博物館によっても、墨書が一番鮮明に残る部分について赤外線撮影がなされている。ただその積文等が同博によって公表されることはなかった。
- (6) 『朝日新聞』夕刊（東京本社版）二〇二一年一月二十二日付他。文化庁文化財調査官（当時）の黒板貴裕氏が「建設当初の古い時代の墨書が壁一面にだけ書いてあるのは珍しい」とのコメントを寄せている。また三上喜孝も当時一般の寺院落書を踏まえてのコメントを寄せている。
- (7) 『東奥日報』二〇二一年五月十日付。この落書については滝尻善英氏が精力的に検討を進めている。同「形見のらくがき」①—⑥、『東奥日報』二〇二一年五月十二日—十九日、同「八戸清水寺観音堂の「形見の歌のらくがき」について」『東奥文化』九三、二〇二二。
- (8) 前掲註（5）でも触れたように、当寺には「円覚寺奉納海上信仰資料」があり、その中心となるものが船絵馬である。船絵馬について詳細な報告はおそらくなされていないと思われるが、国の有形民俗文化財に指定された時のデータ（福井敏隆・外崎純一作成）をもとにしたものが註（3）前掲『深浦町史』下に掲載されている（五〇四—五〇九頁）。船絵馬と落書に見える地名は、深浦を中心とした宗教を含む日本海交流のネットワークを示すもので、本科研の趣旨にもよく合致する貴重な史料となる。
- (9) 三上喜孝『落書きに歴史を読む』吉川弘文館、二〇一四。この時期の寺社に書かれた落書は、全国各地に存在していたことが確認されており、その背景には観音信仰などにもとづく巡礼の盛行が考えられている。
- (10) 深浦円覚寺薬師堂内厨子保存図、図面番号一七二—一七五、原図は縮尺1/8、画像提供元は、奈良文化財研究所。
- (11) 前掲註（5）で触れた横浜市歴史博物館の赤外線撮影は、この部分について行われている。
- (12) 三上註（9）前掲書。
- (13) 三上註（9）前掲書。
- (14) 三上註（9）前掲書。
- (15) ひかり拓本とは、上相氏によって開発された手法で、様々な角度で光を照射・撮影してできた影から、画像を合成する画期的な技術である。奈良文化財研究所「ひかり拓本プロジェクト」参照。  
<https://www.nabunken.go.jp/research/hikataku.html>
- (16) 三上註（9）前掲書によれば、これまで花押の存在は知られていたが、黒印の存在は知られていない。

(17) 【正面】 1右側面側、同3右側面側、同4右側面側等。

【謝辞】 円覚寺薬師堂内厨子の調査・撮影にあたっては、海浦由羽子氏をはじめとする同寺のみなさまに大変お世話になりました。さらに現地での作業にあたっては、深浦町教育委員会の伊東信氏、青森県史編さんグループ（当時）の古川淳一氏、青森県埋蔵文化財調査センターの伊藤由美子氏らにご協力いただきました。また八戸市清水寺の落書については、滝尻善英氏から情報を提供していただきました。末尾ながら厚く謝意を表します。

（おぐち・まさし 法政大学教授）

（みかみ・よしとか 国立歴史民俗博物館教授）

（たけい・のりこ 日本大学教授）

（ふくい・としたか 弘前大学國史研究会副会長）

（たきもと・ひさふみ 弘前大学教育推進機構特任教授）